

＜書 評＞

二木 立（日本福祉大学教授・前代々木病院リハ科）

医療経済学

臨床医の視角から

砂原茂一（国立療養所東京病院）

これはユニークな書物である。

世界のどこでも医療費が高騰して国家財政をおびやかすものだから経済学の専門家が医療経済研究に乗出すし、一方病院倒産時代を迎えて医療機関の管理者がなれない手付きで計算器を操るようになった。しかしこの本の著者は病室、外来、機能訓練室、図書室などの間を毎日忙しげに走りまわっていた中堅の臨床医であるから視角はおのずからこれとは異なるのは当然である。序文にも明らかなように著者は経済学者たちの扱い慣れたマクロ医療経済学と彼らの眼のとどかないミクロ医療経済学を同時に押えようと試みる。そしてそのために刻苦勉励して手に入るかぎりの資料、文献を収集している。医師の給与水準を推定するために日本医事新報の求人広告を利用しているなどはその一例であって旧著「世界のリハビリテーション」で発揮された情報収集能力はここでも大いに物をいっているように見える。

本書の構成は第1章医療と経済では医療における投入、産生、生産性の特徴を論じ、第2章では国民医療費の構造分析と国際比較を行い、資料の足並の大変不揃な各国の数値を吟味、補正することによって日本の特性を浮び上げ、第3章では費用便益分析の手法を駆使して医療の質を低下させることなく費用を節減する道を探り、恐らく体験によると

思われるその実例を提示する。医療技術の進歩と医療費の関係を扱った第4章ではCTと透析についての実証的分析を行って、医療費を押し上げるのはむしろ使用頻度の高い臨床検査と新薬であることを明らかにし、第5章医師所得の構造では医師所得は国民医療費の約2割に一定することを見出し、第6章は病院倒産を取り上げ、倒産は設備投資に失敗した中小病院に多発することを指摘し、それを克服するための、青年医師を取込んだ再活性化のノーハウを実例を示して明らかにしている。最後に補論として医療経済学の国際的趨勢にもふれている。

このように筋書を辿っただけでもマクロからミクロに至る視野の広さは驚くべきものがあり今日までの類書の域を大きくはみ出していることは明らかで、まさに著者の独壇場とっていいであろう。刻苦勉励が目に見えるような労作である。そして臨床医家たちはこれこそ自分たちの求めていた医療経済学であると納得するにちがいないから医療関係者の間に広汎な読者を見出すことが期待されるのである。

著者は本書の発刊と時を同じうして、臨床を完全に離れるわけではないらしいが、医療福祉の政策の研究者として教壇の人となつたらしい。したがって今後はより多くの時間を医療経済学の研究にも割くことにな

るのであろう。その意味で本書はむしろ著者のこの方面の研究生活のための新しい出発点として受取るべきものであろうから版が改められるごとに一層の充実と掘下げを期待したい。そしてその意味で経済学に全く素人の読者としての素朴な感想を書き留めることを許されたい。

本書はマクロ医療経済学から出発してミクロ医療経済学に至って、そこで終わっているのであるが望むらくはここからもう一度マクロに帰ってその土台を揺すぶってもらいたかった。マクロの場に立止っていたずらに防衛費の膨張と医療費の圧縮の矛盾を論じて終るのではなく、困難な現実をしっかりと受止めてミクロの合理化に努め病院倒産を防ぐ現実的努力を怠らないのは眼の前にいる患者を必死で守らなくてはならない立場の医師として当然の姿勢ではあるが、ややもすれば病院経営に無関心になり勝な青年医師にまで薬剤差益を活用することや請求もれや査定減点を防ぐことに協力させるという涙ぐましい努力の場面で本書が終わっているのはいささか物足りないと思うのである。このような涙ぐましい努力を足場としてもう一度マクロの医療経済に立ち帰り、その近來の動向についての批判と将来あるべき姿についての提言を著者から聞きたいと考えるのは私だけではないであろう。確かにわが国ではアメリカ流の費用便益分析への関心が低いことは確かだけれども医療にはある意味で費用便益分析を超えた何物かが求められるのではないであろうか。そしてそこに医療経済学の特質が存在するのではないであろうか。

（A 5，頁284，1985，¥3,300，
¥300，医学書院 刊）